

# 厚労科研 辻井班（発達研修開発）

## 1) 3. 発達検査・知能検査等のアセスメント

中京大学心理学部

明翫 光宜

## メッセージ

- 発達検査・知能検査は、発達支援では多く実施されている。
- しかし、その結果を支援に有効に活用されているのかといわれると、必ずしもそうとはいえない。
- 本人と検査者が約2時間かけて実施されるものであるため、支援につなげる活用が重要。

# 発達障害があるということは？

- 日常生活は、**認知特性**（認知の凹凸）による理解や学習の偏りがある
- 外側からは出来ない事・問題行動だけが結果として見えている。  
しかし、その結果に至ったプロセスの理解が必要で**情報処理過程**が鍵
- 発達と認知（知能）についてのアセスメントが重要になる
- 発達障害であることは、**支援を受ける権利がある**ということ
- アセスメントの必要性：支援やその継続の必要性を示すエビデンス

# アセスメントとは？

- 心理アセスメント=人間の心理特性を幅広く測定・評価・査定する視点
- 心理学の歴史では:個人の異常性や病理を発見するのではなく、リーダーシップや勇気などという積極的な価値を見出そうとした流れから生まれた
- 事例の人格やとりまく環境に関する情報を系統的に収集・分析し、その結果をまとめて事例への支援方針の仮説を立てるプロセス

# 発達とは？

- 私たちは、成長の過程で、周囲の理解を深め、新しいスキルを獲得し、自分を取りまく環境へうまく反応し、行動する（吉田, 2009）
  - 発達：時間の経過とともに、環境との相互作用として生じる成長と能力の変化の過程（**身体機能、知的機能、精神機能**）（永田, 2014）
1. 発達が正常・・・・・・・・その年齢みられる発達の特徴がみられる
  2. 発達が遅れている・・・子どもの発達が期待される水準まで達していない

# 発達検査

- 発達アセスメントする目的（永田, 2014）
  1. 発達歴・行動観察・身体所見・養育態度などを考慮しながら子どもの**発達の現状**を的確に把握
  2. 現在の子どもの言動を理解し、**その後の発達経過**を予測
  3. 現在できうる**適切な支援**に結び付けていく

# K式発達検査

- 1951年に嶋津峯眞、生澤雅夫らによって、京都市児童院（1931年設立、現・京都市児童福祉センター）で開発された発達検査
- 新版K式発達検査2001（0ヶ月～成人）
- 0歳～成人まで適用でき、対象児者の精神発達の状態を発達年齢（developmental age: DA）で示せる
- 下位尺度
  1. 姿勢・運動（postural-motor: P-M）
  2. 認知・適応（cognitive-adaptive: C-A）
  3. 言語・社会（language-social: L-S）



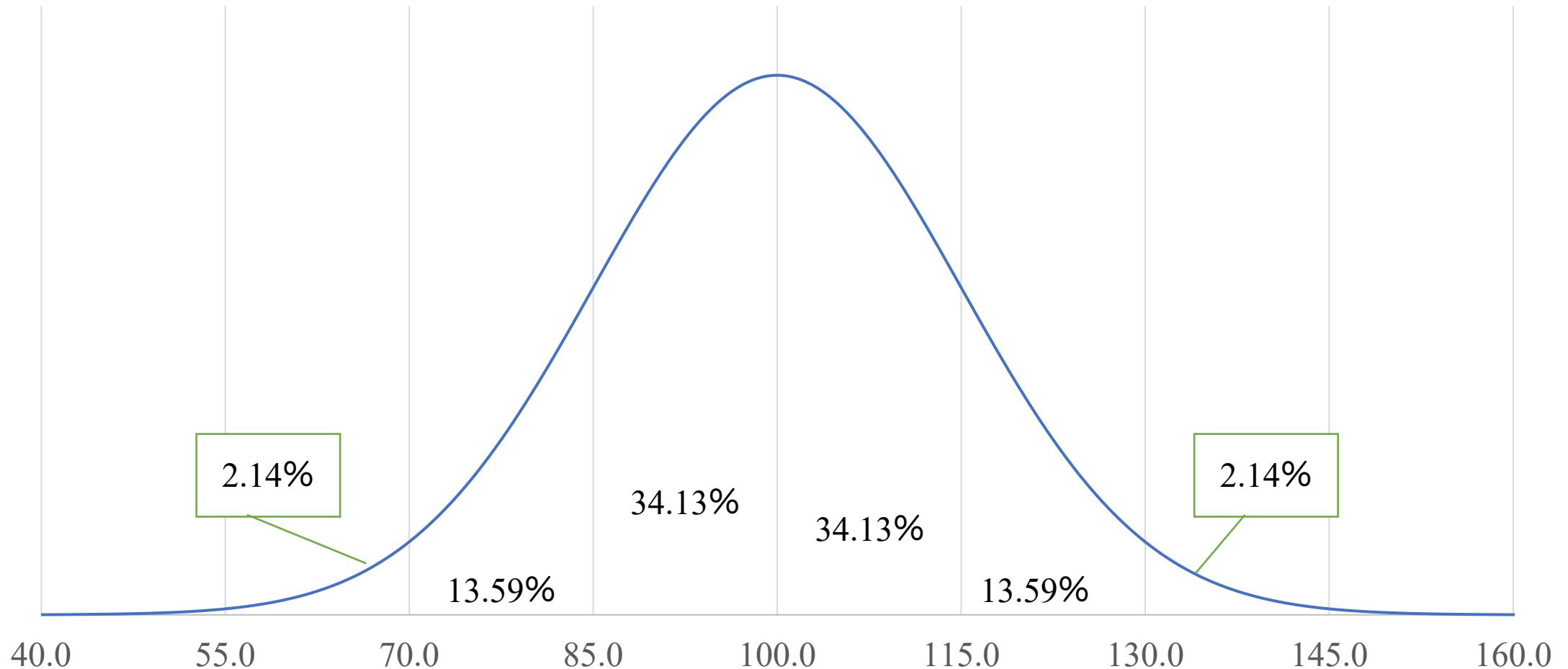


# 知能とは？

- 研究者の数だけ定義がある
- APA心理学辞典(2013)  
情報の獲得や経験からの学習、環境への適応、理解、あるいは思考や推論の適正な利用を可能にする能力
- 新しい環境に適応していくために発揮される能力

# 知能水準や総合指標の考え方

1. 知能は、平均を100、標準偏差15に置き換えて計算する(標準化)
2. 標準偏差2つ(2SD)以上平均値から離れている場合は異常値とされる
3. 70以下と130以上は偏った数値と判断される



# 知能が発達障害支援に必要なわけ

- 知能は以下の水準を大まかに推測できる
  1. 言葉でのコミュニケーションがどこまで可能か？
  2. 周囲で起きていることを把握して言葉で伝える力
- 知的能力の水準によって支援者のコミュニケーションの工夫が変わる
- 知能指数の情報だけでは足りない
  1. 各課題ごとに数値化・グラフ化できる：**情報処理の特徴**（認知特性）
  2. 検査場面を1つの**面接場面**と考える（杉山, 2011）：課題として何を提示したら子どもが**どんな反応を示したか**というプロセスが重要

# 知能検査の使い分け(染木, 2014)

- ウェクスラー式知能検査 (WAIS、WISC)

1. 重度の知的障害児者の場合、**測定不能**になり不向き
2. 年齢平均に比べて非常に低い場合、評価点が1になる
3. 言語性記憶の比重が高く、結晶性知能(学校で積み上げる知識)の占める割合が多い

日本版WAIS-IV刊行委員会(2018). WAIS™-IV知能検査 日本文化科学社  
日本版WISC-IV刊行委員会(2010). WISC™-IV知能検査 日本文化科学社

- 田中ビネー知能検査 V

1. ウェクスラー式に比べて**適用年齢・範囲ともに広い**
2. 学齢期以前の課題には**運動面の課題がある**
3. **生活年齢や認知水準が低め**のクライアントの状態の理解に有効

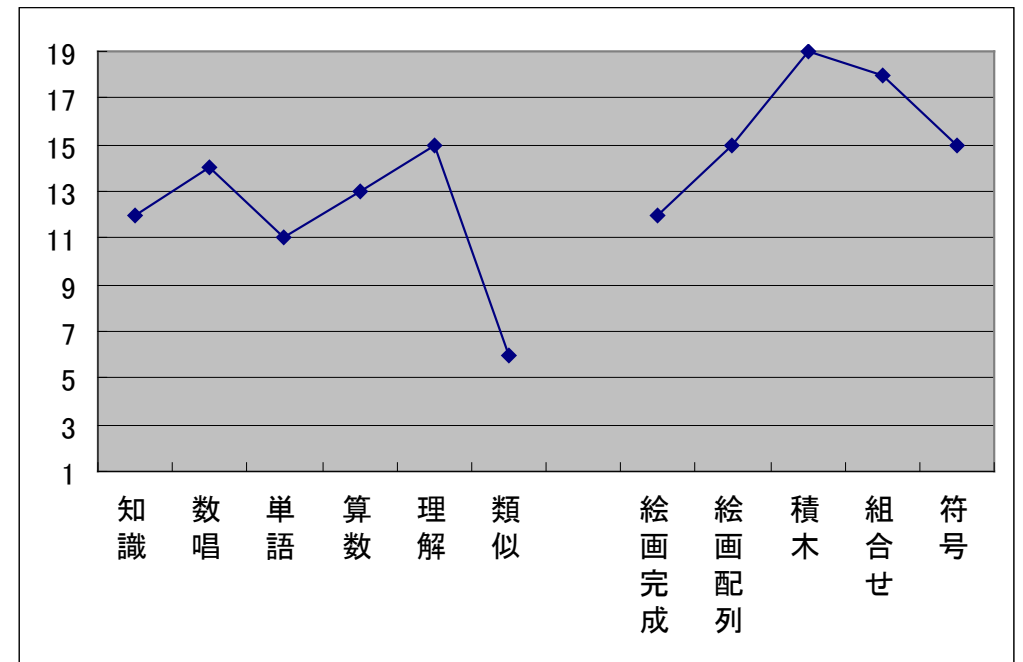
# 知能検査・認知検査の使い分け

- 日本版KABC-II: **認知特性の詳しいアセスメント**
  1. 教示において検査刺激が絵や図を多く使用されている
  2. **聴覚的短期記憶の苦手なクライアント**の能力を適切に把握できる
  3. 認知特性の優位性がわかる
    - 同時処理
    - 継次処理

藤田・石隈・青山・服部・熊谷・小野 (2013). 日本版KABC-II 丸善出版

# 知能検査のグラフに注目しよう

- 知能検査（認知検査）のプロセスにその人の認知特性が現れる
  1. 知能検査（認知検査）では認知特性がグラフの山と谷であらわれる
  2. 能力の山は、多くの場合はその人の得意な能力
  3. 能力の谷は、その人の苦手な能力



## 1つ1つの反応にも注目してみよう

- 知能検査（認知検査）の反応にその人らしさがみえてくる
  1. 日常の言葉をどのようにとらえているか
  2. 日常で出会う小さな問題（困ったこと）をどのように解決していくか
  
- 総合指標→グラフ→個々の反応までみてくると
  1. その人の困難感と認知特性の関連がつかがる
  2. 日常の学習課題の解決や習得で問題となるプロセスが理解できる（前川, 1993）
  3. これらの理解によって、当事者の困難さに対応した工夫や支援プログラムを考えることが出来る

## まとめ：発達検査・知能検査の活用のすすめ

- どこで実施できる？・・・医療機関（小児科・精神科）  
教育センター、発達障害者支援センター  
大学の心理相談室
- 「見ればわかる、この人はこんな特徴」と経験則で見立てるのではなく、  
知能検査・発達検査によって、その人の困難感やSOSの謎を客観的に理解し、  
関係者と共有する
- 「心理検査レポートにある子ども像」と「実際の子どもの言動」とを比較・照合
- 心理検査の専門家（公認心理師/臨床心理士、言語聴覚士）の活用



# 文献

- G.R. ファンデンボス他 (2013). APA心理学大辞典. 培風館.
- 古荘純一・磯崎祐介 (2014). 神経発達症(発達障害)と思春期・青年期——「受容と共感」から「傾聴と共有」へ. 明石書店.
- 前川久男 (1993). 認知障害. 湯川良三編 新・児童心理学講座4 知的機能の発達. 金子書房. 243-279.
- 永田雅子 (2014). その他の発達検査. 辻井正次監修 発達障害児者支援とアセスメントのガイドライン. 金子書房. 107-113.
- 染木史緒 (2014). 知能検査・発達検査 (総括). 辻井正次監修 発達障害児者支援とアセスメントのガイドライン. 金子書房. 114-117.
- 杉山登志郎 (2011). 自閉症児への教育. 日本評論社.
- 吉田敬子 (2009). 0歳から10歳までの心の発達. 齊藤万比古 (編) 子どもの心の診療. 中山書店. 16-30.